

## 第7章 国内総生産（支出側）の推計

### 1. 民間最終消費支出

民間最終消費支出は、a. 家計最終消費支出に b. 対家計民間非営利団体最終消費支出を加えたものである。

なお、「民間最終消費支出」に一般政府及び対家計民間非営利団体から家計に対し、現物による財貨又はサービスの形で提供される「現物社会移転」を加算したものが、「現実家計最終消費」となる（「現物社会移転」については、第8章「4. 現物所得の再配分勘定の推計」を参照）。

#### (1) 家計最終消費支出

家計最終消費支出は以下の項目から成る。

家計最終消費支出（＝①＋②－③）

- ① 国内家計最終消費支出
- ② 居住者家計の海外での直接購入
- ③ 非居住者家計の国内での直接購入（控除）

「家計最終消費支出」の大部分を占める「国内家計最終消費支出」の推計方法は以下のとおりである。

また、②居住者家計の海外での直接購入、③非居住者家計の国内での直接購入については、『国際収支統計』に基づいて推計する。

#### a. 国内家計最終消費支出推計の基本体系

##### (a) 名目値の推計

##### i. 暦年計数の推計

国内家計最終消費支出暦年計数は、コモ法によって推計する市場生産者の産出する財貨・サービス分と、非市場生産者による家計への「財貨・サービスの販売」を合算して推計する。コモ法では、コモ8桁品目で推計し、各品目は88目的分類に集計することによって、マトリックスを作成する。同様に、一般政府、対家計民間非営利団体の「財貨・サービスの販売」についても88目的に分類し、これをコモ法によるマトリックスと合算することにより、88目的分類からなる国内ベースの最終消費支出マトリックス（コモ集計マトリックス）（暦年計数）を作成する。ただし、コモ法による暦年計数には、国内家計最終消費支出に含まれない「現物給付」分が含まれているため、その分を控除する。なお、国内家計最終消費支出の分類には、上記目的分類のほか、形態

分類があるが、88 目的の各目的分類は形態分類（4 形態）のいずれか一つに対応するよう設計されている。

ii. 四半期計数の推計

四半期の国内家計最終消費支出は、コモ暦年計数を補助系列によって四半期分割した上で、四半期ごとの「財貨・サービスの販売」を加えることによって求める。補助系列は、並行推計項目、共通推計項目についてコモ法と同様の 88 目的分類マトリックスを推計することによって求める。

iii. 表章形式

88 目的分類別及び 4 形態分類別に集計し、それをまとめた 12 目的分類、4 形態分類で表章する（表 7-1、縦：目的分類、横：形態分類）。

b. 四半期分割のための補助系列推計方法

国民経済計算推計手法解説書（四半期別 GDP 速報（QE）編）を参照のこと。

(2) 対家計民間非営利団体最終消費支出

対家計民間非営利団体のサービス産出額（中間投入＋雇用者報酬＋固定資本減耗＋生産・輸入品に課される税）から、同生産者の財貨・サービスの販売額及び自己勘定による研究・開発に係る総固定資本形成額を控除することによって推計する（第 4 章「2. 対家計民間非営利団体関連項目の推計」参照）。

## 2. 政府最終消費支出

(1) 年度計数の推計

政府最終消費支出とは、一般政府のサービス産出額（中間投入＋雇用者報酬＋固定資本減耗＋生産・輸入品に課される税）から他部門に販売した分である財貨・サービスの販売額及び自己勘定による研究・開発に係る総固定資本形成額を差し引いた一般政府の自己消費分に、医療費、介護費、教科書購入費等、一般政府が家計に供給するため、市場生産者から購入するための支出（現物社会移転（市場産出の購入））を加えたものである。

なお、一般政府の現実最終消費については後述する（第 9 章「4. 現物所得の再分配勘定の推計」参照）。

年度計数の推計に当たっては、中央政府、社会保障基金については決算書等、地方政府については『地方財政統計年報』等により中間投入、雇用者報酬等の各項目を積算する。（第 4 章「1. 一般政府関連項目の推計」参照）

第7章 国内総生産（支出側）の推計

表7-1 国内家計最終消費支出88目的分類一覧

	1. 耐久財	2. 半耐久財	3. 非耐久財	4. サービス
<b>1. 食料・非アルコール</b>				
1101 バン及び穀物			○	
1102 肉及び肉加工品			○	
1103 魚及び水産加工品			○	
1104 ミルク、チーズ及び卵			○	
1105 油脂			○	
1106 果物			○	
1107 野菜			○	
1108 砂糖、チョコレート及び菓子			○	
1109 その他の食料品			○	
1201 コーヒー、茶及びココア			○	
1202 その他の非アルコール飲料			○	
<b>2. アルコール飲料・たばこ</b>				
2100 アルコール飲料			○	
2200 たばこ			○	
<b>3. 被服・履物</b>				
3101 系及び生地		○		
3102 衣服		○		
3103 その他の衣服及び衣服装飾品		○		
3104 クリーニング及び衣服の修理費				○
3201 靴及びその他の履物		○		
3202 履物の修理費				○
<b>4. 住宅・電気・ガス・水道</b>				
4100 住宅賃貸料				○
4201 水道料			○	
4202 廃棄物処理				○
4301 電気			○	
4302 ガス			○	
4303 液体燃料			○	
4304 固体燃料			○	
4305 熱エネルギー			○	
<b>5. 家具・家庭用機器・家事サービス</b>				
5101 家具及び装飾品	○			
5102 絨毯及びその他の敷物	○			
5103 家具・装飾品及び敷物類の修理費				○
5200 家庭用繊維製品		○		
5301 家庭用器具	○			
5302 家庭用器具の修理費				○
5400 ガラス器具類、食器類及び家庭用品		○		
5500 住宅及び庭用の工具備品		○		
5601 家庭用消耗品			○	
5602 家庭サービス及び家事サービス				○
<b>6. 保健・医療</b>				
6101 薬品及びその他の医療製品			○	
6102 治療用機器	○			
6200 外来・病院サービス				○
6300 入院サービス				○
6400 介護サービス				○
<b>7. 交通</b>				
7101 自動車	○			
7102 オートバイ	○			
7103 自転車及びその他の輸送機器	○			
7201 予備部品及び付属品		○		
7202 燃料及び潤滑油			○	
7203 個人輸送機器の保守及び修理費				○
7204 その他のサービス(交通)				○
7301 鉄道旅客輸送				○
7302 道路旅客輸送				○
7303 航空旅客輸送				○
7304 外洋・沿海・内水面旅客輸送				○
7305 その他の輸送サービス				○
<b>8. 通信</b>				
8100 郵便				○
8201 電話及び電報				○
8202 その他の通信サービス				○
<b>9. 娯楽・レジャー・文化</b>				
9101 ラジオ・テレビ受信機及びビデオ機器	○			
9102 写真・撮影用装置及び光学器械	○			
9103 情報処理装置	○			
9104 記録媒体		○		
9105 パソコン	○			
9106 視聴覚、写真及び情報処理装置の修理費				○
9201 楽器	○			
9202 音楽機器の修理費				○
9301 ゲーム及び玩具等		○		
9302 スポーツ用具等		○		
9303 庭、草木及びペット関連商品・サービス			○	
9401 レクリエーション及びスポーツサービス				○
9402 文化サービス				○
9403 キャンブル性ゲーム				○
9501 書籍		○		
9502 新聞及び定期刊行物			○	
9503 その他の印刷物			○	
9504 文房具及び画材			○	
9600 パッケージ旅行				○
<b>10. 教育</b>				
10100 教育				○
<b>11. 外食・宿泊</b>				
11100 飲食サービス				○
11200 宿泊施設サービス				○
<b>12. その他</b>				
12101 美容院及び身体手入れ施設				○
12102 個人ケア用器具及び製品			○	
12201 宝石及び時計	○			
12202 その他の身の回り品		○		
12301 生命保険				○
12302 非生命保険				○
12400 金融サービス				○
12500 その他のサービス				○
12600 FISIM				○

## (2) 四半期計数の推計

一般政府に関連する計数は、決算書等から基本的には年度ベースで把握されるため、四半期計数が入手できないものについては、年度額を以下のとおり四半期分割する。

- ① 雇用者報酬は当該四半期別の給与総額で分割する。
- ② 中間消費は年度計数を四等分する。
- ③ 生産・輸入品に課される税は年度計数を四等分する。
- ④ 固定資本減耗は原則として暦年計数を四等分する。
- ⑤ 財貨・サービスの販売は、ヒアリング結果によるパターンで分割する。
- ⑥ 自己勘定の総固定資本形成（研究・開発）は、本章3.（1）②非市場生産者による自己勘定の研究・開発に係る総固定資本形成 参照。
- ⑦ 現物社会移転（市場産出の購入）のうち社会保障給付（医療、介護分）及び戦傷病者等無賃乗車券負担金は、年度計数を四半期ごとの支出比率等により割り振る。教科書購入費は、年度計数を四等分する。

## 3. 総固定資本形成

## (1) 推計の基本体系

総固定資本形成の暦年計数は、コモ法によって推計される市場生産者の産出する財貨・サービス分と、一般政府や対家計民間非営利団体といった非市場生産者による自己勘定の研究・開発に係る総固定資本形成分を合算して推計される。こうした方法では各需要項目について品目別の暦年計数が推計される一方、一般政府や企業といった投資主体別の内訳や四半期計数を明らかにするものではない。

したがって、上記の方法によって推計した総固定資本形成（暦年計数）と整合性のとれた各主体別及び四半期別の総固定資本形成を推計するためには、別途各主体について四半期別の総固定資本形成を推計し、これにより上記の方法によって推計した総固定資本形成を分割する必要がある。その分割は次のように行う。

## ① コモ法により推計される総固定資本形成

## a. 知的財産生産物を除く固定資産

まず一国全体の住宅投資（暦年計数）を推計し、コモ法により推計した総固定資本形成（暦年計数）からこれを差し引き、コモ法による「住宅投資以外の総固定資本形成（暦年計数）」を求める。

次に公的企業の総固定資本形成（暦年計数、知的財産生産物を除く）と一般政府の総固定資本形成（暦年計数、知的財産生産物を除く）を別途推計し、「住宅投資以外の総固定資本形成（暦年計数）」からこれを差し引く。こうして求めたものが民間企業設備のう

## 第7章 国内総生産（支出側）の推計

ち知的財産生産物を除く分（暦年計数）となる。

各主体別及び四半期別の計数の推計方法は、下記（2）需要項目別推計方法を参照。

### b. 知的財産生産物

コモ法で推計される総固定資本形成のうち知的財産生産物分は、生産者が1年を超えて生産に使用するコンピュータ・ソフトウェアのうち受注型ソフトウェア、パッケージ型ソフトウェア及び自社開発ソフトウェア、鉱物探査・評価、並びに研究・開発（非市場生産者による自己勘定分を除く）から構成される。

コンピュータ・ソフトウェアについては、暦年値を『産業連関表』の固定資本マトリックスより求めた比率により、公的分（公的企業、一般政府）と民間分（民間法人企業、対家計民間非営利団体）に按分する。四半期計数は、受注型ソフトウェア及びパッケージ型ソフトウェアについては『特定サービス産業動態統計』（経済産業省）におけるソフトウェアの月次売上高を用いることで分割し、自社開発ソフトウェアについてはリスマン・サンデー法により分割する。鉱物探査・評価については、決算書より推計する。投資額はすべて公的分（一般政府）とし、四半期計数は年度値を四等分する。研究・開発（非市場生産者による自己勘定分を除く）については、『科学技術研究統計』における部門別の内部使用研究費を組み替える等して公的分（公的企業）・民間分（民間法人企業）、非金融分・金融分といった制度部門別に総固定資本形成額を推計する。但し、第一次年次推計では、調査・公表時期との兼ね合いで同統計が利用可能ではないため、市場生産者分（民間企業、公的企業）は株式会社日本政策投資銀行の『設備投資計画調査（大企業）』における研究開発費実績の対前年度伸び率等を用いて推計を行う。四半期計数は、研究・開発費との相関がある『法人企業統計』における金融・保険業を除く全産業における資本金10億円以上の販売管理費を補助系列として分割する。

### ②非市場生産者による自己勘定の研究・開発に係る総固定資本形成

一般政府や対家計民間非営利団体による自己勘定の研究・開発に係る総固定資本形成については、『科学技術研究統計』における部門別の内部使用研究費を組み替える等により推計する。但し、第一次年次推計では非市場生産者分（一般政府、対家計民間非営利団体分）はトレンドにより延長推計を行う。四半期計数は、活動分類別に、人件費分については『毎月勤労統計』の関係する産業の賃金指数と常用雇用指数の動きを用いて、その他の費用分については4等分とする。

## （2）需要項目別推計方法

### ①住宅投資

公的住宅投資も含めた全住宅投資額について、『建築物着工統計』の着工建築物（構造別・用途別表）の工事費予定額から推計する。居住専用住宅（準住宅を含む）・居住

産業併用建築物の工事費予定額を構造別・用途別平均工期により出来高に転換し、四半期別の進捗ベースの投資額を求める。こうして求められた居住専用住宅及び居住産業併用進捗額に、工事単価、工事面積、着工統計の漏れ等を補正するための修正倍率（国土交通省推計）を乗じ、修正済居住専用住宅進捗額については全額、修正済居住産業併用建築物進捗額についてはその7割を居住分として合計することにより、全住宅投資額を求める。なお、構造別・居住専用、居住産業併用別平均工期については、原則5年ごとに『建築統計年報』（国土交通省）の工事期間データ等から推計し直した値（間の期は補間）を用いる。これに、コモ法で推計された不動産仲介手数料（住宅関連）の総固定資本形成額を加算する。不動産仲介手数料については、住宅投資額の法人・家計比率を用いて、制度部門への分割を行う。

a. 民間住宅

民間住宅投資は、四半期別の全住宅投資額から、別途推計した四半期別の公的住宅投資額を差し引くことにより推計する。各主体別推計は以下のように行う。

(a) 対家計民間非営利団体住宅投資

『民間非営利団体実態調査』から推計する。

(b) 法人住宅投資

『建築物着工統計』の着工建築物の工事費予定額のうち、建築主が「会社」である居住専用住宅・居住産業併用建築物の工事費を進捗転換する。これに修正倍率を乗じて漏れ等を補正し、居住専用住宅進捗額の全額と居住産業併用建築物進捗額の7割を合計して四半期計数を求める。

なお、会社が建築主である分譲住宅については、家計（個人）が購入することから家計住宅に分類されるため、会社の進捗額から分譲住宅を控除した額が法人住宅投資となる。この分譲住宅については、『住宅着工統計』（国土交通省）における会社の分譲比率を用いて推計する。

さらに、法人住宅の非金融法人と金融機関への分割については、『昭和45年国富調査』（経済企画庁）や『法人企業統計』等における法人資産の金融・非金融比率を用いて推計する。

(c) 家計（個人）住宅投資

民間住宅投資額より、非金融法人住宅、金融機関住宅及び対家計民間非営利団体住宅を控除することにより四半期別に推計する。

b. 公的住宅

中央政府の一般会計及び特別会計の「決算書」における公務員宿舍施設費、『地方

## 第7章 国内総生産（支出側）の推計

『財政統計年報』における普通建設事業費のうちの住宅費、都市再生機構及び地方住宅供給公社の賃貸住宅にかかる住宅建設費を集計し、これから用地費を控除して年度計数を求める。

つぎに、『建設総合統計年度報』（国土交通省）に掲載されている公共部門における居住用建築の出来高ベースの金額を用いて、年度計数を四半期に分割し、四半期計数を推計する。

### ②非住宅投資

#### a. 民間企業設備

供給側推計、需要側推計の双方から推計値を作成し集計値のレベルで統合する項目（並行推計項目）を主体とし、共通推計項目として別途推計するコンピュータ・ソフトウェアの民間法人企業分、対家計民間非営利団体分、及び研究・開発の民間法人企業分、対家計民間非営利団体分を加算して推計する。

なお、制度部門別設備投資額の推計は、民間企業設備の総額の四半期計数から、対家計民間非営利団体の設備投資額を控除したものを、後述する需要側推計による非金融法人企業、金融機関、家計（個人企業）の計数によって分割し、消費税額を控除（第2章「5. 消費税の取扱い」参照）することにより推計する。

#### (a) 並行推計項目

##### (イ) 需要側推計値

年次推計では、需要側補助系列の四半期比率を用いて、比例デントン法により、年次推計暦年値（コモ法により推計された総固定資本形成（暦年計数）から民間住宅、公的固定資本形成、対家計民間非営利団体の設備投資額を控除したもの）の四半期分割を行う。

需要側補助系列は、非金融法人企業及び金融機関については『四半期別法人企業統計』（財務省）（以下『季報』という。）、個人企業については『個人企業経済調査』（総務省）等から推計する。

※「国民経済計算推計手法解説書（四半期別 GDP 速報（QE）編）平成 23 年基準版」

II. 需要項目別名目値の推計方法 参照

##### (ロ) 供給側推計値

供給側推計で得た総固定資本形成を使用する。

※「国民経済計算推計手法解説書（四半期別 GDP 速報（QE）編）平成 23 年基準版」

I. 供給側の推計方法 参照

(ハ) 統合方法

需要側推計値と供給側推計値を加重平均後の推計精度を最も高めるウェイトで加重平均する。

※「国民経済計算推計手法解説書（四半期別 GDP 速報（QE）編）平成 23 年基準版」

Ⅱ.需要項目別名目値の推計方法参照

(b) 共通推計項目

(イ) 対家計民間非営利団体設備投資（ソフトウェア分除く）

年次推計では『民間非営利実態調査』等から推計する。

(ロ) ソフトウェア

上述の本章 3. (1) ① b. 知的財産生産物を参照のこと。

(ハ) 研究・開発

上述の本章 3. (1) ① b. 知的財産生産物を参照のこと。

b. 公的企業設備

(a) 知的財産生産物を除く固定資産

知的財産生産物を除く固定資産については中央、地方それぞれ以下のとおり推計する。

中央の公的企業については、各機関の貸借対照表上の有形固定資産から土地と立木を控除したものの前年度末と当年度末との差額を算出し、これに損益計算書上の減価償却費・固定資産除却損等を加え、消費税額を控除することにより年度計数を推計する。

地方の公的企業については、『地方財政統計年報』の資本的支出のうちの建設改良費を求め、これから用地費及び消費税額を控除することにより年度計数を推計する。

四半期分割は、『建設総合統計年度報』の発注者別、工事種類別工事費における該当項目の出来高ベース工事費の四半期パターンによって行う。

(b) 知的財産生産物

コンピュータ・ソフトウェア、鉱物探査・評価、研究開発からなる知的財産生産物については、上述の第 7 章 3. (1) ① b. 知的財産生産物を参照のこと。

c. 一般政府

(a) 年度計数の推計

中央政府及び社会保障基金については、決算書の「施設整備費」等の投資関係の目



## 第7章 国内総生産（支出側）の推計

を集計したものから用地費を控除することにより推計する。戦車、艦艇、戦闘機等の防衛装備品については、別途、国の決算書、『経済産業省生産動態統計』等により推計する。

地方政府の場合は『地方財政統計年報』の普通建設事業費、災害復旧事業費等及び下水道事業の建設改良費などを集計し、用地費を控除する。（第4章「1. 一般政府及び政府サービス生産者関連項目の推計」を参照）

知的財産生産物のうち鉱物探査・評価相当分については決算書により推計する。研究・開発については、第7章3.（1）②非市場生産者による自己勘定の研究・開発に係る総固定資本形成を参照。コンピュータ・ソフトウェアについてはb. 公的企業設備と同様である。

### （b）四半期計数の推計

研究・開発以外については、『建設総合統計年度報』の発注者別、工事種類別工事費における一般政府に該当する部門の出来高ベース工事費の四半期パターンによって四半期分割を行う。研究・開発については、第7章3.（1）②を参照。

## 4. 在庫変動

在庫変動は、コモ法による推計値をもとに推計する。

### （1）民間在庫変動

民間在庫変動額は、コモ法により推計したグロスのコモ値から、公的企業及び一般政府の在庫変動額、消費税控除額（第2章参照）を差し引き、残差として求める。

なお、コモ値における育成生物資源の仕掛品在庫額は、実現在庫法（RIM）により推計する（第2章参照）。

#### a. 四半期計数

※「国民経済計算推計手法解説書（四半期別 GDP 速報（QE）編）平成23年基準版」

##### I. 供給側推計の方法参照

#### b. 部門別計数

法人企業・個人企業、及び個人企業の内訳である農林水産・非農林水産といった部門別の計数は、民間在庫変動額を、人的推計による在庫品の部門別比率を基準に分割する。

なお、金融機関及び対家計民間非営利団体は在庫を持たないものとみなす。

c. 在庫残高デフレーター

在庫のデフレーターとしては、残高デフレーターが表章されている<sup>25</sup>。

民間在庫変動の残高デフレーターは、下記の手順によりインプリシットに算出する。まず、『四半期別法人企業統計』等から推計した基準年末の名目在庫残高＝実質在庫残高とにおいて、これをベンチマークに実質在庫変動（フロー）を累計し各期の実質在庫残高を算出する。次に、各期の実質在庫残高とデフレーターから各期の名目在庫残高を算出する。以上の手順で算出した名目在庫残高を実質在庫残高で除して在庫残高デフレーターを算出する。

(2) 公的在庫変動

a. 分類

公的在庫変動は在庫を保有する政府諸機関の部門分類により、公的企業分と一般政府分に分けて表章する。

b. 在庫の推計方法

防衛省の保有する弾薬類については、防衛省の財務書類における弾薬類の棚卸資産の当期末在庫残高と前期末在庫残高をそれぞれ実質化し、その差額として得られた実質在庫変動に期中平均価格を乗じることにより、在庫品評価調整後の名目値を推計する。食料安定供給特別会計（食糧管理勘定は一般政府）、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（公的企業）など在庫の存在が想定される機関の貸借対照表上の当期末在庫残高と前期末在庫残高の差額をとり、これに消費税額控除、在庫品評価調整を行って名目値を推計する。

実質値の推計方法は、数量が把握できる機関、品目については基準年の数量、価格より算出した基準単価に数量を乗じて実質残高を求め、数量が把握できない機関、品目については『企業物価指数』から計算した期末の価格指数を残高デフレーターとして、名目残高より実質残高を求める。さらに当期末在庫残高と前期末在庫残高の差額を実質在庫変動とする。

四半期分割は、四半期毎の在庫残高を調査している機関については調査値を用いているが、調査を行っていない機関については四半期で等分する。

<sup>25</sup> 在庫変動の名目値と実質値からフローベースのデフレーターを計算することも可能である。しかし、在庫変動は変動が激しく、負値を取ることもあるため、残高デフレーターを表章することとしている。

## 5. 財貨・サービスの輸出入

『国際収支統計』の項目を一部SNAの概念に組み替えて推計する（詳細は第6章参照）。